

「人間失格」者の〈語り〉をめぐって

—太宰治「人間失格」を中心に—

A study of Narratology about "Ningenshikkaku" Osamu Dazai

坂上 幸

Miyuki Sakaue

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：太宰治, 人間失格, ナラトロジー

Key words : Osamu Dazai, Ningenshikkaku, Narratology

1. 研究目的

太宰治の「人間失格」は1948年6月号から8月号の雑誌『展望』に3回にわたって連載された。その連載途中で作者太宰治は入水自殺した。発表時期とスキャンダラスな入水事件が重なったことにより、発表当時には作者自身の自殺理由を詮索する解釈が成された。その後、代表的な作家論である奥野健男の『太宰治論』（近代生活社、1956年1月）が発表された。奥野の作品に登場するモチーフと作者の実生活の要素とを重ね合わせる解釈は長年、先行研究の土台となってきた。

だが、「人間失格」というテキスト内部に登場する大庭葉蔵が作者太宰治であるという記述は存在しない。架空の語り手である大庭葉蔵が回想する手記のエピソードを、安易に作者の実生活と結びつける解釈は小説本文が有している〈語り〉の構造を軽視していることにならないだろうか。本研究は、小説本文から立ち現れる二人の語り手に着目することで作者の実生活と切り離れた新たな解釈を提示することを目指すものである。

昨年度は、手記の語り手大庭葉蔵に着目した。語り手葉蔵は「人間」とは異なる立場を自作自演し、そこから「人間」と関わることで、「人間」が無自覚に言葉を発する態度を批判していることを明らかにした。

今年度は、「はしがき」と「あとがき」の語り手「私」に着目した。「はしがき」と「あとがき」は葉蔵が手記を執筆してから約10年後の戦後の地点で、手記内部にも登場したマダムから手記を受け取り読んだ語り手「私」によって語られている。この戦後の地点で、手記を綴った大庭葉蔵という

人物は消息不明になっている。つまり、「人間失格」の小説内部で、手記は大庭葉蔵の手から離れ、約10年後の読者である「私」に受け渡されたことになる。語り手「私」は「あとがき」で「現代の人たちが読んで、かなりの興味を持つに違ひない」と葉蔵の手記に戦後的意義を見いだしている。語り手「私」は手記の語り手葉蔵を如何に評価しているのか、葉蔵の手記を戦後の言説空間に置き直したとき、如何なる意義が見いだせるのか、この2点について明らかにすることを目指した。

2. 研究実施内容

まずは、語り手「私」の葉蔵に対する評価についてである。「人間失格」は直筆原稿が現存する希少なテキストである。特に「あとがき」部分に関しては、青森県近代文学館に執筆メモが、日本近代文学館に草稿と完成原稿が所蔵されている。それにも関わらず直筆原稿を用いた本文の異同に関する先行研究は少ない。『資料集第二輯 太宰治・晩年の執筆メモ』（青森県近代文学館、2001年8月）や「日本近代文学館所蔵太宰治直筆原稿集」DVD版（雄松堂書店、2014年）等を閲覧し、「あとがき」部分の執筆過程をたどった。

活字本文において、語り手「私」は手記にも登場するマダムから手記を受け取っている。そして、手記読了後に語られた「あとがき」の冒頭で葉蔵を「狂人」と称している。だが、構想初期の執筆メモでは、語り手「私」に手記を渡した人物も葉蔵に対する評価もかなり異なっていた。

執筆メモで登場するのは手記にも登場した「マダム」ではなく、手記内部に登場しない第三者で

あった。その「文芸評論家友人」と「私」は、「人間」から「失格」した葉蔵こそが「人間」であるという批評と、その葉蔵を「神の子」と近似の存在とみなそうとする解釈を述べている。

次に、執筆メモからノンブル無しの草稿へ移行する際に、執筆メモで登場した「文芸評論家友人」は姿を消し、ノンブル無しの草稿に「マダム」が登場した。これに伴って、直接手記の書き手葉蔵を知らない「私」と手記の書き手葉蔵をよく知る「マダム」という二項対立が生成された。両者の評価は「人間」とは異なる存在とみなしている点は共通しているが、その内実は対照的なものである。「私」の評価については、執筆メモの「人間、失格」者こそが「普通の『人間』」であるという批評が失われ、「狂人」とみなす解釈が新たに生成された。対して、手記を書いた葉蔵を知る「マダム」は、彼を「神様みたいないい子」と評価している。それから、ノンブル有りの草稿と完成原稿の言語表現を比較することで、葉蔵を「狂人」とみなす「私」の立場がより明確になった。「私」は手記内部で語られている葉蔵を実在する人物と想定する際に友人の立場から関わろうとしている。「行ってもらい」ではなく、「連れて行き」が採用され、「マダム」が被ったと推測する被害の程度が増していく表現が選択されることで、友人と仮定した場合の葉蔵に対する態度が生成されている。それは手記内部で何の疑いもなく葉蔵を「狂人」とみなして脳病院に入れた「人間」と同様の立場である。手記読了後に執筆した「はしがき」においても、「私」は写真に写る葉蔵を「人間」とは異なる存在として説明している。手記外部で「私」が葉蔵を「狂人」とみなす態度が、手記内部で批判されていた他者に対する評価を発する態度と同等のものであるとするならば、葉蔵の「人間」批判は手記外部の戦後の読者にも向けられている。

次に、2点目の葉蔵の手記が有する戦後的意義についてである。昨年度に手記の語り手葉蔵は「人間」が言葉を発する態度を批判していることを明らかにした。この「人間」批判は戦後の時代性と結びつくものなのだろうか。松本和也は『太宰治『人間失格』を読み直す』（水声社、2009年6月）の中で、戦後の言説空間に「人間」という言葉が、明確に定義されることなく氾濫していたと指摘した上で、「人間失格」はそのような時代性と結びつく言葉の乖離を批判していると結論づけている。

では、太宰の作品においても戦後に「人間」という言葉が頻出しているのだろうか。太宰全作品における「人間」という言葉の出現数を調査した。その結果、「人間失格」が86例で最も多かった。これは語り手葉蔵が「人間」との相違を語ることで自身を「人間」から「失格」した存在として定め、そこから「人間」批判を企てていることを考えれば当然の結果である。一方で、他の戦後の太宰作品で「人間」という言葉の出現数は多くはなく、他の時期の太宰作品と比較しても戦後の作品に「人間」という言葉が頻出する傾向を見いだすことはできなかった。

また、「人間」という言葉の出現数を調査する中で「美男子と煙草」という掌編に「人間でなくなつてゐる」という表現を発見した。「美男子と煙草」は1948年3月に雑誌『日本小説』に発表された小説であり、「人間失格」と発表時期が近い。両者を比較すると、「美男子と煙草」は「太宰」という呼称が用いられ、実際に太宰が戦後に浮浪者を見に行った体験が語られていて、「人間失格」の虚構性が際だった。また、「美男子と煙草」にもみられる自身の特徴を一方的に生成していく〈語り〉の方法と、それによって設定された「人間」と異なる立場は、葉蔵の手記が持つ戦後の時代性を帯びた表現といえる。一方で、語り手葉蔵が一貫して「人間」と対立する他者の立場から言葉を発することにまつわる「人間」批判を企てていたことは、「美男子と煙草」との相違であり、葉蔵の手記にみられる独自性ともいえる。

3. まとめと今後の課題

これらの研究成果は修士論文としてまとめた。「あとがき」の草稿研究に関しては、語り手「私」の言説が他のあり得た言葉を排除することで生成されていたことを明らかにし、一定の成果を提示することができた。だが、葉蔵の手記を戦後の言説空間に置き直す作業は「美男子と煙草」との比較のみでは不十分である。戦後には「人間」という言葉に対して明確な語義が定義されていないのだから、個々の文脈ごとにその用法を分析した上で比較する必要があった。今後、詳細な分析を行ってから論文化し投稿したい。